昭和四十八年度

特別研究生・研究員研究発表要旨

金剛三昧経について

木村宣彰

金剛三昧経は、大正大蔵経第九巻に収められる一巻八品の経典で、その翻訳者は不明である。現存する最古の経録である出三蔵記集巻三には涼土異経として涼代の失訳経典として著録している。その後の歴代三宝紀等の経録では散佚欠本として載せているが、唐開元十八年に出来た開元釈教目録巻十二には現存経典として拾遺編入されている。経録類を見る限り現存の経の外に異訳はなかったと考えられる。

この経の内容は種々広範で教理的にいろいろな問題を提起している。この経が教理的に古来より重視された点を要約すれば次の三点であろう。

㈠ 先ず禅の菩提達磨との関係である。清の誅震が金剛三昧経通宗記で述べている様に、達磨の二入四行説が、この経に説く理入行入の二入説の影響のもとに生じたものであるという。宇井博士、鈴木博士等の先学も等しくこの点を認めている。即ち禅の初祖達磨に与えた影響を指摘し得る。

㈡ 次にこの金剛三昧経には、第九阿摩羅識が説かれていて、それが真諦三蔵の阿摩羅識説の根拠になったという点である。新羅の元暁は金剛三昧経論の中で「唵摩羅者是第九識、真識三蔵九識之義依是文起」という。

㈢ 更にこの経に本覚利品があり、そこで本覚について説かれている。本覚思想は日本の仏教に大きな影響を与えたが、その本覚を説く最古の経が、この北涼失訳の金剛三昧経であると考えられている。

この外、この経は空の思想をはじめ唯識思想、浄土思想などいろいろな教説を含んでいる為、種々の問題を提起するが、歴史的に見た場合には以上の三点は特に注目すべきものである。ところが従来この経に関する研究はあまり為されていないようである。実際に経録の上からいっても、教説の上からいっても殊更に問題にすべき余地はないようである。しかるに先年、水野弘元博士が印度学仏教学研究第三巻第二号に「菩提達磨の二入四行説と金剛三昧経」という論文を発表され、そこでこの経の成立を疑い、唐中期に中国で偽作されたものではないかと推定された。そこで金剛三昧経の真偽如何を解くために経典そのものの内容形式に関して検討を加えてみようと思う。

この経典は比較的小部の経典であるが、その中には般若、法華、涅槃等々の大乗経典の重要な教理教説が説かれている。また説相の上でもそれら大乗経典と極めて類似する箇所が少なくない。その中法華経に類似する例を数種あげれば次の如くである。

先ず金剛三昧経序品に

爾時尊者、大衆囲遶、為諸大衆説大乗経、名一味真実無相無生

決定実際本覚利行……仏説此経已、結加趺坐、即入金剛三昧、身心不動

とある。これは法華経序品のいわゆる別序の文に酷似している。すなわち

爾時世尊、四衆囲遶、供養供恭尊重讃歎、為諸菩薩説大乗経、名無量義教菩薩法仏所護念、仏説此経已、結加趺坐、入無量義処三昧

ここでは経名と三昧名とが相違するのみである。又、無相行品では法華経の仏智称歎の文と酷似する文があるし、入実際品には

入涅槃宅、著如来衣、坐菩提座、如是之人乃至沙門宜応敬養

という文があり、これは法華経法師品の「入如来宅、著如来衣、坐如来座、爾乃為四衆、広説斯経」とある弘経の三軌の文と類似するのである。この様な例は随処に指摘し得るのである。本覚利品には長者窮子の譬喩を想起せしめる迷子の譬喩があり、開三顕一を説く。このように金剛三昧経は説相、内容ともに法華経に非常に類似するのである。その他、涅槃経、華厳経等との類似も指摘し得るが、端的な例として入実際品の

彼二乗人、昧著三昧、得三昧身於彼空海地、如得酒病惛醉不醒、乃至数劫猶不覚、酒消始悟方是行

の文は入楞伽経集一切品の最後の文に等しい。更に真性空品に「摩訶般若波羅蜜、是大神呪、是大明呪、是無上呪、是無等等呪」と般若波羅蜜の呪名をあげている。これは玄奘訳の般若心経の「般若波羅蜜多、是大神呪、是大明呪、是無上呪、是無等等呪」と同様である。もしこの経の原典が存し、そこにこれと同じ梵文があったとしても北涼の訳者はこのように翻訳しないであろう。大神呪は mahāmantra の訳で「神」は玄奘の挿入である。よってこの呪名は玄奘訳の直接影響を受けたものと考えられる。玄奘が心経を訳したのは六四九年であり、この経が北涼代の訳でなく唐以後の成立となる。紙数の都合で詳しく論じられないが、その外種々の理由から偽経であることは明らかである。

しからば、この経が作られた動機は何であったか。この問題は複雑で簡単には論じることが出来ぬが、一つのヒントは宋高僧伝の唐新羅国黄竜寺元暁伝の記載である。即ち

我（龍）宮中先有金剛三昧経、乃二覚円通示菩薩行也、今託仗夫人之病、為増上縁、欲附此経出彼国流布耳、於是将三十来紙、……龍王言、可令大安聖者詮次綴縫、請元暁法師造疏講釈之、夫人疾愈無疑……、安得経排来成八品、皆合仏意

このことは三国遺事にも載っており、これに従えば新羅の使者が、龍宮で三十紙からなるバラバラの経を得て、新羅に持ち帰り、大安がこの散経を銓次綴縫し一巻八品の金剛三昧経と為した。それは皆仏意に合うものであるという。そして元暁はこの経を講じ金剛三昧経論を著したという。これが何に依ったものか。また大安とはいかなる経歴の人物か等々不明な点もあるが、この記載に従う限り金剛三昧経は唐ではなく、新羅の仏教界で作られたと考えることあながち不自然ではない。

そもそも新羅の仏教は、隋唐の仏教が宗派的であったのと異り、通仏教的で融通無碍な性格を有し、会通融合をモットーとするもので宗派的対立を嫌う。この性格は新羅仏教の末期を除きほ

ぼ一貫するものであった。中国の宗派仏教を受容した初期には特に顕著である。この様な新羅の性格は特に花郎道や元暁の和諍思想にその例を認めることが出来る。

この新羅仏教の性格からいっても金剛三昧経が、新羅の大安や元暁周辺の人々によって作られたものと考えるのが尤も自然である。即ち金剛三昧経は、中国の南北朝から隋唐にかけて重視されたあらゆる経論、各宗の教理教説を殆んど網羅しており、それらを仏説の名のもとに会通統合しようと試みたのが、この経の偽作の動機であったと考えられる。この経自身が別名として「摂大乗経」或いは「無量義宗」と自称しているのはこの事を如実に物語るものである。この経の真偽問題に就いて中国仏教の枠内のみで考える時、禅宗や摂論宗との関係に目がうばわれるが、広く朝鮮仏教に注目するとそこに一つの解答が得られるのである。

天台宗における祈雨

佐々木　令　信

天台宗・承澄の撰にかかる『阿娑縛抄』は、周知の如く、台密の諸作法・口伝を抄録している。二百二十八巻にわたるその内容は、台密における事相修学の基本的名著といっても過言ではない。その書誌については、切畑健氏の「阿娑縛抄―その成立と撰者承澄―」（仏教芸術70）に譲るが、前後約四十年の長きにわたって起草され、書きととのえられ、弘安年間まで次第に完成のはこびに至ったものである。今あたえられた課題を考える足がりをつかむために仏教全書本によって『阿娑縛抄』に見える祈雨に関する項目を抽出すると次の如くなる。すなわち、熾盛光法日記集（巻第59）・尊勝（巻第60）・仁王経（巻第73）・文殊八字（巻第101）・大随求（巻第107）・水天（巻第157）である。これらのうち、尊勝法と水天供が比較的詳しい位で、ほとんどが祈雨法がその主体ではなく、他の功能に付随して多少でてくる程度であり、東密の阿娑縛抄的存在である『覚禅抄』に較べて祈雨に関する項目はきわめて少ない。試みに『覚禅抄』から祈雨に関する記載のある項目をあげると、七仏薬師・大仏頂下・尊勝下・請雨経・仁王経上・守護経法・聖観音・如意輪・不空羂索・准胝・一字文珠法・随求・不動・孔雀経法・太元法・軍荼利・大威徳・迦楼羅法・水天・舎利ということになる。

このように、東密の覚禅抄は台密の阿娑縛抄に較べて祈雨法の項目が多岐にわたり、しかも請雨経などその記載内容も詳細なものが多い。それは何故かというと、台密の場合の四箇の大法が、熾盛光法・七仏薬師法・普賢延命法・鎮将夜叉法であり、東密の場合、請雨経法・守護経法・孔雀経法・仁王経法であることに示される台密と東密の性格の相違や、東密に対する初期天台宗の密教受容の遅れを指摘できるのではないか。それはとりもなおさず特に後者にいえることであるが、いかに密教の受容に先きがけて祈雨法がいち早く受容されたかを示している。

左大弁源経頼が、雨僧正仁海の言として『左経記』長元五年